

特別陳列「畠田和一貝類コレクション展 11 畠田和一が採集していた絶滅危惧種 7」

2024 年 10 月 12 日（土）～2025 年 3 月 23 日（日）

環境省レッドリストに掲載されている二枚貝類

展示する種（5 種）：キヌタレガイ、ササノハ、コヅツガイ、ユウシオガイ、ヤマトシジミ

畠田和一が採集していた種のうち、環境省レッドリスト 2020 に掲載された二枚貝類の種を展示する。これらの種は日本全体で緩やかな減少傾向にある。多くの地域ではただちに絶滅のおそれがあるとまでは言えない状態ながらも、岡山県では近年の埋め立て・干拓・海水汚染などによって海域の環境が著しく悪化したため、既に絶滅したか、または絶滅寸前の状態にあると考えられる。

（岡山大学 福田宏）

キヌタレガイ

*Solemya pusilla* Gould, 1861

(二枚貝綱：原鰐亜綱：キヌタレガイ目：キヌタレガイ上科：キヌタレガイ科)

岡山県：絶滅危惧 I 類

環境省：絶滅危惧 II 類 (VU)

展示標本：#2046 [倉敷市下津井] 六口島

北海道南部から九州までと、朝鮮半島及び台湾から知られる。タイプ産地は「Hakodadi Bay, in 5 fathoms, muddy bottom」(北海道函館湾，水深 5 尋，泥底)。

近縁な別種アサヒキヌタレ *Solemya japonica* Dunker, 1882 とともに潮下帯のアマモ場の砂泥中に産し，両種が同所的に見られる場所もあるが，本種の方が内湾奥部の泥底を好む傾向が強く，還元的な（酸素に乏しい）環境にも見られることがある。全国的に見ると湾奥は湾口部以上に環境攪乱が激しいため，どちらかといえば湾口部を好むアサヒキヌタレよりも本種の方が強い減少傾向に陥っており，環境省レッドリストでも本種の方が高次のカテゴリに含められている。香川県でも近年はアサヒキヌタレの方が多く確認されたとの報告がある。近年の瀬戸内海では広島県竹原市賀茂川河口の干潟や，同県三原市と因島市の間の海中に現れる沖洲の細ノ洲などで比較的多産するが，これらはむしろ例外的で，全体としては強い減少傾向が認められる。

岡山県ではかつて岡山大学理学部附属玉野臨海実験所（当時）が 1978 年に刊行した目録にアサヒキヌタレとともに登載され，畠田和一コレクション中にも今回展示した半片 1 個が現存する。しかしそれ以後は死殻も一切再発見されていない。アサヒキヌタレは今も岡山県内での生存が確認されているため，本種も県内に生き残っていないとは言い切れないが，両種は棲息環境の嗜好性にやや差異が見られ，本種だけが環境変化についてゆけず先に消滅した可能性は十分に考えられる。



ササノハ

*Lanceolaria oxyrhyncha* (Martens, 1861)

(二枚貝綱：自鰓亜綱：古異歯区：イシガイ目：イシガイ上科：イシガイ科)

岡山県：準絶滅危惧

環境省：準絶滅危惧 (NT)

展示標本：#4456 [岡山県]

京都・大阪両府，福井・愛知・岐阜・三重・滋賀・兵庫・岡山・島根・広島・徳島各県から記録がある。おそらく日本固有種。トンガリササノハは異名。九州には別種キュウシュウササノハが産する。

平野部の小河川や用水路など，緩やかな流水中の砂泥底または砂礫底に棲息する。移動能力は高いものの，実際に動くことはあまりない。2年（殻長約40 mm）で性成熟し，寿命は10年程度と推定される。春～夏の妊卵期に幼生が放出され，オイカワ，カワムツ，ヨシノボリ類などを宿主として鰓などに寄生する。本種は場所によっては比較的高密度で見られるものの，産地は局所的で，本州西部・四国においても一度も記録がない県（鳥取・山口・香川・高知各県）もあり，分布は不連続である。

岡山県では，1932年に桂又次郎が当時の県内で通用していた貝類方言をまとめた際，「御津郡今村」（現・岡山市北区今）で「カタナガラスガイ，カタナガラス」と呼ばれていた種として示した図は明らかに本種である。また畠田和一もやはり「岡山市」で「カタナカラスガイ」と呼ばれていたと記録しており，地元在住の人々が存在を明確に認知して方言名が定着するほど多産していたことが窺える。

現在の県内でもオバエボシ・ニセマツカサガイ・カタハガイに比べると産地・個体数ともに多い。片山久（2001）は1990年代に赤磐市（旧・赤磐郡熊山町）奥吉原辺谷，瀬戸内市邑久町豆田，岡山市中区賞田（祇園用水），同市北区牟佐林原，同区横井上，同区三野，同区高松，倉敷市酒津倉敷川，同市西阿知町西原，同市連島町西之浦，井原市下稲木町の計11箇所を産地として挙げており，県南部の比較的広い範囲から産出が認められている。また近年も児島湖とその周辺一帯（岡山市南区浦安南町，郡，灘崎町西七区，藤田錦六区）から生貝または新鮮な合弁死殻が報告され，児島湖内部及びその辺縁に形成された干拓地間の用水路などでの個体群の定着は明らかである。このほか岡山市の市街地を流れる水路で目にする頻度は高く，瀬戸内市でも邑久町福中で確認されるなど，近年も少しずつ新産地が見出されているため，岡山県での本種は現時点で絶滅の危機が差し迫っているというほどではない。

ただしその個体群のほぼ全てが開発の影響を受けやすい場所に立地しており，宅地造成などに伴う水路や池沼自体の消失や，生活・工業排水の流入による環境悪化に常に晒されている。したがって，現時点でいかに個体群が少なくないといえども楽観視はできず，各個体群の動向への継続的な注視が望ましい。



コヅツガイ

*Eufistulana grandis* (Deshayes, 1855)

(二枚貝綱：自鰓亜綱：異歯区：ツクエガイ目：ツクエガイ上科：ツクエガイ科)

岡山県：絶滅危惧 I 類

環境省：準絶滅危惧 (NT)

展示標本：#4336 (棲管) 備中 [浅口市] 寄島，1956 年 1 月 23 日

タイプ産地はフィリピンのセブ島。日本初の本種の詳細な報告は Iw. Taki (1943) が広島県尾道水道) 産個体について行い，同時に和歌山県田辺湾と沖縄島羽地内海にも産すると述べた。その後，分布の北限は房総・能登半島とされている。国外は中国広東省～広西壮族自治区，台湾，ニューカレドニアから知られる。

波穏やかながらも海水の交換が適度にあって，水質・底質ともに富栄養化・還元化せず清浄に保たれた内湾湾口や島嶼間の海峡周辺の潮下帯（水深約 60 m まで）砂泥底に棲息するが，現在の日本では沖縄島羽地内海などごく一部の場所を除き生貝は確認されていない。棲管とその破片は各地の浚渫砂泥中などに時折見かけるものの，多くは中に殻も残されておらず，有史以前の化石が多くを占めている可能性もある。

瀬戸内海でそもそも，Iw. Taki (1943) による最初の報告からして浚渫砂泥からの採集品に基づいていたため「もちろん全個体が死殻」とあり，生貝を確認したとは文中のどこにも書かれていない。その後も生貝の報告は一切なされなかったため，稲葉 (1982) はその時点で既に「絶滅か？」と疑っていた。近年の広島県芸南地方でも生貝は呉市の 1 箇所で確認されているのみである (濱村，2022)。最近の他の海域では唯一，成ヶ島探見の会 (2023) が「由良湾では，特に佐毘沖水深 5～8 m の泥底に多く生息しているものと思われる」として生貝の画像を公表しており，その附近には個体群がまだ安定的に維持されているとみられるが，これはむしろ例外的で，全国的にみると本種は明らかに絶滅寸前と考えられる。

岡山県では畠田和一コレクションに今回展示した棲管 1 個（「1956. 1. 23. 黒田 [徳米] 氏同定」）が現存するものの，これも途中で破損して前半部分だけが残し，殻はない。つまり本県では畠田和一の存命中ですら生貝や新鮮な死殻が見出されていなかったことになる。今世紀に入ってからには棲管の破片も得られないままであったが，2023 年 6 月，国土交通省中国地方整備局の調査によって倉敷市味野湾の水深 19.7 及び 31.7 m（ともに細砂混じりシルト底）から複数の生きた幼貝が発見され，岡山県内にも辛うじて生存していると判明した。本種はその棲息環境の条件から類推して恐らく水質汚濁に弱く，瀬戸内海では早い時期に衰退に向かったものと考えられる。また，高度経済成長期の過剰な海底浚渫が多く個体群を消滅させた可能性が高い。現在の岡山県では味野湾からごく少数の生貝が確認されたのみで，小規模な個体群が局所的にしか存在しないとみられるため，今後の存続が危ぶまれる。



ユウシオガイ

*Jitlada culter* (Hanley, 1844)

(二枚貝綱：自鰓亜綱：異歯区：ドブシジミ目：ニッコウガイ上科：ニッコウガイ科)

岡山県：絶滅危惧Ⅰ類

環境省：準絶滅危惧 (NT)

展示標本：#4275 備前〔瀬戸内市〕牛窓，波部〔忠重〕氏同定 1952.2.

日本（陸奥湾以南の本州・四国・九州）と朝鮮半島南部の固有種。東京湾，相模湾，浜名湖，三河湾，伊勢湾，瀬戸内海，有明海など大規模な内湾の奥部に生じる砂泥干潟潮間帯中部に特異的で，そのため産地はもともと不連続的に存在し，特に日本海側は同様の環境が少ないため七尾湾，油谷湾，博多湾などに限定される。湾奥の干潟は多くの場合都市に近接するため本種の棲息環境は人為的改変の影響を被りやすく，東京湾や相模湾では絶滅寸前の状態に追い込まれている。瀬戸内海ではかつては全域に普通とされ，現在も周防灘～伊予灘沿岸などには多産する場所が残っているが，中央部では減少傾向が著しい。香川県での近年の調査では，三豊市父母ヶ浜の中潮帯では多くの生貝が採集されたものの，丸亀市土器川河口前浜では死殻が採集されたのみであったとされ，一部産地での個体群消滅を示唆する報告がなされている。

しかし岡山県はそれ以上に悲惨な状況である。かつては大垣内（1968）が倉敷市沙美海岸で採集したと述べ，畠田和一コレクション中にも「備前〔瀬戸内市〕牛窓」（今回の展示標本），「児島湾〔玉野市〕八濱町地先 干拓地へ切内側泥揚場採集」（「1952.6.3.」，合弁1個体，#6843），「児島郡本荘村〔現・倉敷市〕塩生」（「黒田〔徳米〕氏同定品 1951.1.」，合弁4個体，#4239）の各標本が現存する。これらの多くが光沢や色彩もよく保存されているため生貝を採集したものと推測され，当時は県内の幅広い範囲にごく普通に見られたことが窺われる。

ところがその後は目にする機会がめっきり減り，今世紀に入ってしばらくは死殻も見出せないままであったが，2018年3月の備前市日生町鹿久居島における調査で少数の生貝が見出され，まだ本県から絶滅していないことがようやく確認された。とはいえその他に健在な個体群は知られず，畠田標本が示す往時の多産ぶりからかけ離れた状態で，本来なら存在していた県内の産地の大半が1960年代以降に消失したことは明らかである。また他の県では本種よりテリザクラ *Iridona iridescens* (Benson in Cantor, 1842)の方が産地が少ないが，岡山県では逆で，後種は上記鹿久居島や高梁川河口など複数の場所に今も棲息が認められる。テリザクラはより汽水域寄りの軟泥底にも見られるため，本種よりは富栄養化に強い可能性があり，本県では水質の激的な悪化によって本種の方が先に滅んでいったと考えられる。いうまでもなく，埋め立て・干拓や護岸による干潟の破壊も本種の棲息地をことごとく奪った。畠田標本の産地である八浜や塩生に，本種が戻ってくることはもはやないであろう。



ヤマトシジミ

*Corbicula japonica* Prime, 1864

(二枚貝綱：自鰓亜綱：異歯区：マルスダレガイ目：シジミ上科：シジミ科)

岡山県：絶滅危惧 II 類

環境省：準絶滅危惧 (NT)

展示標本：#2616 [岡山市] 笹ヶ瀬川産 (?) [昭和] 28 [=1953]. 4. 7.

国内で食用として漁獲対象とされ、盛んに消費される「シジミ」は多くの場合本種である。アジアに広く分布する汽水性シジミ類のうち最も北方まで分布する種であり、北海道以南の本州、四国、九州から知られ、南西諸島には分布しない。国外ではアムール川河口、ロシア沿海州、サハリン島から産出記録がある。朝鮮半島東岸では本種のみが分布するのに対し、分布の境界となる南岸では本種と形態的に異なる別種が同所的に産する。

同属のマシジミ (=タイワンシジミ) *Corbicula fluminea* (O.F. Müller, 1774) が淡水域に産するのに対し、本種は河口下流部で海水と淡水が混じる汽水域に見られ、緩やかな流水中の砂礫底～砂泥底に産する。特に北海道網走湖、青森県十三湖、茨城県涸沼、島根県宍道湖などはブランド化した産地として名高く、現在も盛んに市場へ流通している。

全国的には依然として多産する場所も多い一方で、瀬戸内海中央部では恐らく汚水流入による水質悪化のために最近 50 年間で激減し、生貝を目にする機会は少なくなった。特に、香川県において近年確認された個体は食用に供された後に投棄されたものである（つまり現地産ではないかもしれない）可能性が否定できない。仮に他産地由来の個体であった場合、香川県における近年の確実な産出記録は皆無となり、同県では絶滅した可能性が高い。

岡山県もこれに近く、倉敷市の高梁川河口では古い半片死殻が稀に見られるだけで、生貝は 21 世紀に入って一度も確認されていない。岡山市の旭川・吉井川河口では少数ながら生貝が見出されているが、小ぶりの個体が散発的に出現する程度で、かつてのごとく一網打尽に漁獲できるほどの個体数や密度にはほど遠い状況である。人工的な放流も繰り返し試みられているものの、ことごとく成功に至っていないことから、各河口の環境状態自体が回復しない限り、本種が元通りに高密度で饒産する光景は戻ってこないと考えられる。岡山・香川両県での本種の惨状は、備讃地方の海岸環境の極端な荒廃ぶりを象徴する現象のひとつとみてよい。

